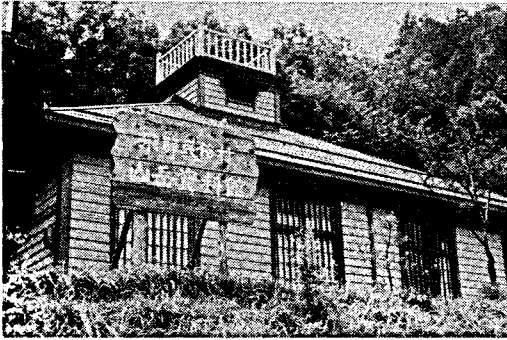


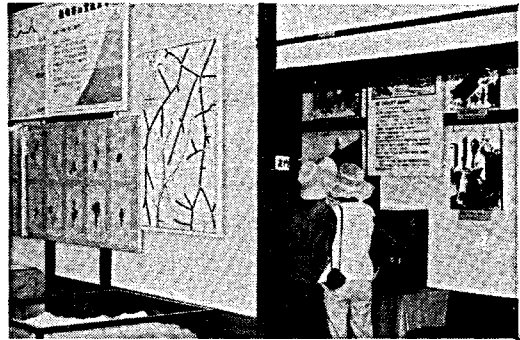
# 岐阜の博物館

編集兼発行

〒483 羽島郡川島町  
エーザイ工園  
内藤記念くすり資料館 内  
岐阜県博物館協会  
責任者 吉田幸平  
振替 名古屋 70106



(高山測候所の古き姿をとどめる山岳資料館の全景)



(植物の垂直分布の展示とエヴェレスト関係の写真展示)

## 館・園紹介 No. 24

## 飛驒民俗村 山岳資料館

〒506 高山市上岡本町 飛驒民俗村事務所 TEL<0577>33-4714

### 飛驒山岳地帯の自然史・生態研究機関への発展を!

飛驒民俗館・野首家、さらに新宮の郷倉、そして、山国の民家を集めた、「飛驒の里」と、数々の施設を含んだ「飛驒民俗村」は、今や山都高山市のシンボルであるし、訪れる人々に、日本人の生活の知恵と歴史の重みを語りかけてくれる野外博物館である。

この広大な地域に散りばめられた、歴史・民俗関係の諸施設の中で、ただひとつ飛驒山岳地方の自然を扱っているのが、山岳資料館である。旧高山測候所の建物を、飛驒民俗館・野首家の南側に移築したもので、その外観は、まさに民俗村の景観にピッタリで、建物自身が文化財であり、ひとつの野外展示物となっている。館内では、北アルプス登山の歴史、植物の標本、動物の剥製、登山用具、山岳写真等が展示され、飛驒山岳地帯の自然について、一応の概説がされている。しかし、飛驒の里を歩るき廻り、車田に接し、ワラビ粉小屋に入り、木の又コレクションを見学し、民家の並んだ風景にみとれたときの、あの感動も心の安らぎも感じないのはどうしてだろうか。民俗村全体構想の中では、いかにも付け足しで淋しいのである。飛驒の生活は、衣・食・住は云うに及ばず、民俗いや思想までも、飛驒の自然風土を抜きにしてはありえなかつたはずである。山岳資料館こそは、専任のナチュラルリスを擁し、専門の自然研究を推進するなかで、展示教育活動はもとより、巾広い自然学習事業を展開すべきであろう。病める現代社会にあって、未来を創造する原点は、近代のなかで失われたものを再認識することである。生きた豊富な資料を周辺にもつ飛驒民俗村は、自然を忘れた現代人に、明日への発展を約束する「自然とヒトとの正しいかかわりあい」をこそ「山岳資料館」で展開すべきである。(小野木)

## 科学館はなぜ一歩進みえたのか (2)

日本モンキーセンター附属博物館 学芸部長 広瀬 鎮

### Ⅱ 戦後、科学博物館の科学教育の展開

これら科学館における諸事業は展示活動を基盤として、学校教育の支援、児童・生徒を対象とする教育事業を活発に行なっている点に特色がみられる。しかも、同好会、友の会等の組織的なクラブ活動を軸として、理科教育の促進をはかりつつ、幅ひろく一般層を対象とした活動が包含されている。これらは一種の準備教育であり、完成教育でないというたてまえをとっている。今日の理工学系博物館の典型的な教育事業プログラムは、すでに、昭和初期に開設された大阪市立電気科学館などの通常事業活動等をもみても実演解説や、見学者実演、研究指導相談など、今日の教育活動でいう体験学習の萌芽が見出せる。

北海道における科学館の教育事業には、幼稚園児、父兄、一般人対象の通俗普及成人の学習会など意欲的なものまでがみられる。これを昭和32年に開館された小樽市青少年科学技術館の社会教育事業にみてみよう。

すなわち小樽青少年科学技術館は主として青少年の余暇を基本的科学知識の習得にむけ、技術を身につけ、高度に発達する科学技術を理解する青少年育成を目的としている。実験室、総合技術実習室、天体観察室等の各施設をもち、青少年や市民が、一つの生活体験をする所として教育事業プログラムがくまれている点に特色がある。また科学館ジュニアクラブ、野外採集会、宿泊臨海実習、学習宿泊旅行などの校外活動を系統的、継続的に実施、理科教室、実験室を勤労青年に開放、各種技術講座（講座約5日間、10～15時間、年間計25～30回）、そして写真、電気、ガス、溶接、自動車整備、設計製図、木工・全工、塗装技術などの技術講座を開放した。婦人対象の「科学・お母さん教室」により、生活科学の指導会なども実施している。

職員規模専任2名、時間嘱託4人によってこれら事業を実施されてきたが、これらの教育事業企画はいづれも社会の発展と関連して工夫創造される教育プログラムとして重視したい。科学博物館における実物教育、Object lessonについては、各館施設とも、経費や、人員、資料の限界から十分効果をあげていない。現状のなかで、近年科学技術史研究とモダン・サイエンス展示研究の両面から理工学系博物館の諸機能を論ずる機運が高まってきた。科学館は、科学史なり技術史を如何にとりあげるかが問題となっている。現在までの理工学系博物館における展示内容は驚ろくべくほど学校教育と密接してきた。理想をいえば、博物館独自の企画で展示がすすめられ、科学館教育面での独自の方法が開発されることがのぞまれる。

しかしながら、博物館の名称を使用することを拒否した科学館は、その実、社会に対しては科学教育の普及に関し、意欲的な方向をもっていたことに注目したい。若い男女や、家庭の主婦などを施設に接近させることに成功し、従来の博物館が行ないえなかった地域住民とのむすびつきに対し、積極的な教育エネルギーを企画者側がもっていたとも云える。

大型理工学系施設とことなり、地方の小規模施設には、運営上の問題も多いが、全体として理工学系博物館は今日なお、産業の側のみを代表するかのよりに、科学技術の解説に明けくれ、現代社会の問題である企業公害、環境汚染などに立ちむかっている施設は少ない。たしかに我国の科学技術振興の一つの政策として、科学館は時流にのって出現したのであるが、地方においての同施設の教育事業は、学校教育とむすびつき、最近科学技術の解説と、科学技術発達の誇示展示などに、依然としてとどまらざるをえない現状なのである。（続く）

イコム会議の急進的方向性〔その2〕

岐阜県博物館協会理事、文学博士 吉田幸平



(センケンベルグ自然史博物館、環境2000年特別展の入口ディスプレイ)

◎ 博物館専門職員に関する議決

専門職員に対しては、博物館学の教育を着実に発展させ、その基本原則を広く知らせることが必要であるとされてきたが、これは、科学基礎学科だけに範囲が限定されてきた事に注目し、下記のように勧告がなされた。

(1) 博物館の専門職員の訓練センター(学芸員コース)は、学生と、経験に加えて補習を要望する専門職員を教育し、これらの実務的博物館技術だけでなく、境界領域の博物館学として、博物館と大学間の密接な協力のうちに、博物館の現実の要求に一致し、そのような人々に、その国によって認承され、国際的にも同等に格付けされる修了証明を付与するものであること。

(2) より高度の勉学のための専門化された機関と大学院のコースは、その課定の中に社会への奉仕、研究と文書作成、文化啓蒙的遺産の発見と保存などの分野における博物館の役割の意味を含めること。

として、学芸員は単なる基礎的資格だけでは駄目で、その博物館に必要な現場向きのものであり、国際的にも同等な資格が与えられなくてはならないとしている。それに、修士に対しては、研究・文化財の発見・社会への奉仕等の位

置づけを明確に打出している。

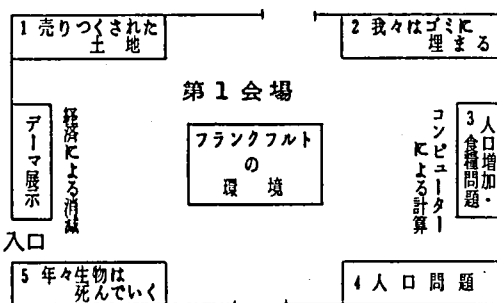
① イコム・テーマ「博物館と近代世界」

大会テーマ「博物館と近代世界」に対して、欧州の各博物館のとりくんでいる特徴の箇条のみ記し、(細部は略)併せて、特徴的な一例を報告する。

- (1) 博物館に対する基本的な認識法  
(日本の博物館との思惟の差について)
- (2) 学芸員の組織と資格(日本の学芸員との差)
- (3) 博物館の分科性と独立性
- (4) 博物館構想と規模、建築
- (5) 博物館収蔵量と展示方法
- (6) 博物館の学校教育と社会教育
- (7) 博物館の国際性と語学能力
- (8) 博物館の環境汚染と自然保護対策展示

この(8)については、1970年のICOMの決議で「すべての博物館は『人類とその環境、というテーマで特別展示をする』とあることを受けたもので、日本の博物館界の環境保全、自然保護への取り組みの貧弱さと比べると、大変な勢力の注ぎようががかわれるものであった。特に、センケンベルグ自然史博物館の「環境2000年展」の展示見取図を紹介して、日本で、岐阜県下での、『人類と環境』展示の充実に期待したい。(終り)

— 環境2000年展展示 —



第2会場 ・母体の汚染 ・胎児への影響  
・鳥は死んでいく

— 地方の小規模館園の立場から —

地方の現実を離れた頭の大会では・・・

岐阜県陶磁器陳列館長 古川 庄 作

空理・空論の華では？

「現代社会における博物館の果たす役割は、人間としての社会教育機関、はたまた生きるための創造研究機関として、それぞれ地域に密着し特色を活して国民の要望に応えるのがその使命である」スローガンはまことに立派に、高らかにかけられていた。然し、果してこの大会の活動はどうであっただろうか。

近い将来、好むと好まざるを問わず吾国に週休2日制が実施され、余暇が所得消費型から、時間消費型へと変ぼうするを余儀なくされると、いとも簡単に言い切っている。中央官庁の行政官吏による先取りしたりたい文句は、無条件に受入れて果してよいだろうか。仮説は定説化されたやに錯覚し、ほんの一握りの大規模館園がそれを指向するかのような言動を主軸として、この大会は始められた。誤った設定は次から次へと誤った誘発を起して、大真面目で空理・空論に華を咲かせ、貴重な時間はいたずらに費消されていった。

ないがしろな教育使命感

レジャーがいつしか企業性を帯び、観光があなたかも教育という仮面をかむって資本投下の対象となっている。観光業者からのつきあげをおもんばかって、館園自体の休日の問題が提起され、立体性を失った待応に右顧左辯の有様であった。根元に物見遊山型の観光客を扱う所謂観光バスには、どう対処してよいか位は自覚すべき現在ではなからうか。一つのまっとうな展開と、それへの努力に悔いがなかったという実感は、得られなかったのがこの大会での感懐である。

各分野に亘る博物館相当施設の中には、この使命感とは裏腹に、時を得たとばかり企業性・採算制を表立てて運営に終始しているものも目

にあまった。来館者の数を競い、入館料の多寡に一喜一憂する姿が写されていた。少なくとも使命感に応えるならば、無料で公開すべきであろうし、仮りに収入を計るとしても、最少限にとどめて、むさぼってはならない。

施設の充実も館園の従事者への待遇改善にも勿論心掛くべきではあるが、部内からこの使命感をないがしろにし、この大義を冒瀆してはならないと想った。

地方弱小館園不在の大会！

例外的な館園の高度な施設と多数の人員・充分とはいえぬも多額の予算をもったものの活動ぶりが、誇示され進展への過程が語られすぎてはいなかったか。

何がこの大会で語られ、計られねばならないか、地に足のつかない100年の大計を語り合りに酔いしれてはいなかったか。90%レベル以下、名目丈の貧弱な館園への対応に欠けるころはなかったかどうか。年に一度の大会は、お祭りだと言いつれぬ筈。1974年の大会は二度とない筈と想った。

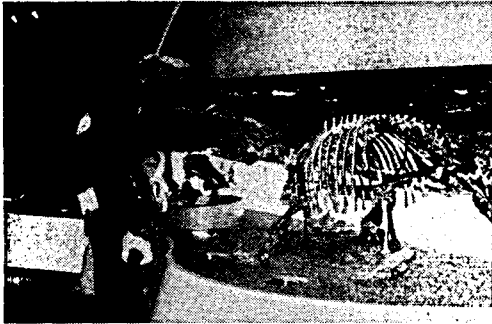
地方にある下部に連なる組織の実情把握に、何が真実の叫びかと考えられたことがあったかどうか。膝を合せ、手を握って語る姿勢が採られているかどうか。大会運営の主軸である大館園の実情とは、まるで違っているのだ。時間をさいて地方群小館園に行脚する意欲は、皆無ではなからうか。ちげに物を見ること、アンケートを求めて事足れとせず、数値化された記録を残すことも大切ではあるが、文字にならぬ声、記録にならぬ数値にこそ真害がある。膚で知って愆しい事柄が、余りにもりわ滑りすぎていったと想われてならぬ大会であった。



瑞浪市化石博物館長  
渡辺卓郎

初代館長 渡辺卓郎氏は、数少ない自然史系博物館界にあって、地域社会に生きて働く博物館づくりに、日夜ご奮闘されておられます。協会には、欠くことのできない博物館人の柱です。

## 研究者と公衆の交流をめざして



### 研究者の感動をみんなのものに

芸術は芸術家仲間だけのものではない。音楽家は音楽会の場所で聴衆とともに陶酔するし、画家は展覧会で全生命を鑑賞者にぶっつける。宗教家も大衆との係り合いで自らも高めているであろう。

研究者の真理を求める姿や新しい発見における感動などは、芸術家や宗教家のそれとほとんど同じ境地であるのに、感動はストレートに一般公衆に伝わって来ない。間接的には、科学もジワジワと大衆のなかに入り込み、社会を大きく動かしているのに違いはないが、もし、科学のもつ静かで美しい感動を公衆に直接伝えることができたら、社会はより豊かになるものと思われる。

博物館に勤務しているといろいろなことに出会い。展示に吸い込まれるようにみとれる人、最後のパネルを一字一字かみしめるように読む人、余韻を楽しむかのように帰る人、こんな人びとをみていると、博物館も劇場や展覧会場やスポーツの場所と同じ要素もっているのではないかと考えられる。人を酔わせたのは、展示品の美しさでもなく、展示技術にまどわされた

ものでもない。実物をもって綴った科学の美しさに魅せられたものであろう。ここに研究者と公衆との交流が障害なく行なわれている姿をみることができる。

### 展示による研究発表を

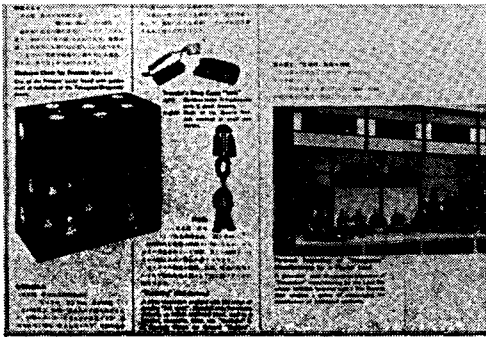
研究者の研究発表の方法は主として論文と口演によってなされているが、いま一つのメディアとして展示が考えられる。展示は写真や図版のみでなく、直接実物を示すことができるし、データも平面的な表ではなく、立体的に表現できる等論文や口演では正確に伝達できない部分を補うことも可能であろう。また、展示によってはじめて、研究者と公衆の接触が行なわれることになり、一般公衆の感覚的な目は意外に正しい批判を下すもので、学術の向上に寄与することがあると思われる。

博物館は展示による研究発表に最も適した施設としてあげられる。常設展示は教科書風な配列が一般的で、新しい研究の発表場所として適当でないことはいうまでもない。したがって、この企画には特別展示室が利用されるであろう。特別展示室は博物館自身の企画で利用するばかりでなく、ひろく、研究者に提供する必要が生じてくる。展示を企画する研究者にとって、経費と労力は論文にまとめるのに較べて、多額にのぼるものと予想されるが、博物館の協力によって、この問題も解決されるであろう。

展示による研究発表は、研究者と一般公衆との交流となるばかりでなく、展示を意図した研究は、新しい研究の道を開くかも知れない。一度、協力者を得て実験してみたい。

## くすり資料館ガイドブック 発刊

内藤記念くすり資料館では、年々展示内容も充実し、見学者も増加の一途をたどり、このたび豪華な案内書を発刊されました。展示資料を写真で載せ、これに邦文・英文の解説がなされている。付帯施設の紹介・くすり資料館までの道案内略地図もあり、くすりの歴史年表もそえられている。



## 文献紹介 博物館と近代世界

(第10回 ICOM大会講演集)

74年6月3日から、コペンハーゲンを中心に行なわれた、第10回国際博物館会議の大会で、研究集会において4人の学者が行なったキーノート・スピーチの、日本語訳である。「進歩か成長か」「環境」「社会」「未来」のテーマで、諸問題を展開しているが、いずれも、博物館人としては、目を通しておきたいもの。「変革が加速化する時代に、静止する施設は生き残れない」「どうしたら博物館は効果的に環境の姿を描くことができるだろうか」「未来と呼ぶ時間の歴史的単位に関して、博物館の役割とは何であるか」など、ここに展開されている論議に接すると、日本の博物館界はまだまだ暗黒時代である。講演訳文集入手希望の方は、〒103 東京都中央区日本橋茅場町1-10-1 浦上天珠堂第1ビル 国際博物館会議日本委員会へ問い合わせを。

## 写真集・乗鞍の雷鳥出版される

岐阜県の鳥であり、場所を定めず国天然記念物に指定されている雷鳥の、四季折々の息吹きと生態をとらえた豪華写真集が出版されました。岐阜県自然環境保全連合の執行部長で、岐阜県野鳥の会々長、丹羽宏氏が、乗鞍岳での調査研究を通して年間撮影したもの。東京新聞・中日新聞出版局発行、A4版、上等箱入りカバー付、カラー16頁、モノクロ96頁、郷土の自然理解の基本書物として、県内の各博物館施設等でも購入されることをおすすめする。申込みは、振替で、名古屋70104、岐阜県自然環境保全連合マデ。定価5,300円を送金のこと。

## 編集後記

★吉田幸平先生の、イコム総会出席報告記はいかがでしたか。欧米の博物館界が、近代社会の緊急最大の課題「環境をよりよくするために」を、真剣に展示している姿に接するとき、経済大国日本、環境破壊一等国日本では、淋しく悲劇的なまでの「博物館と環境」の現実に、やはりまだまだ博物館界の世明けは来ない……と痛感します。

★全国博物館大会の印象記を、古川庄作先生からいただきました。ここにも、世界の博物館界の流れに遅れまいとするあせりと、地方の現実の姿とのズレが浮きぼりにされています。まさに、文化国家劣等生の日本の地方文化基盤の精薄さの悩みが痛々しく感じられます。

★今回から、博物館人広場を設けました。放言、悪言、言いたい放題、とにかく博物館活動、事業、博物館行政、等、何でも結構ですから、どんどんご意見お寄せ下さい。

★やっと定期発行にもどりました。会員諸兄からは、機関紙遅発行に、お叱りを受けました。再度お詫び致します。(小野木)